

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2024年(令和6年)
9月5日 第736号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2024年4月20日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

ゆざわ のりこ
湯澤規子 著

『ウンコの教室

環境と社会の未来を考える』に参加して



山添 綾子

天気の良い休日の午後、公民館の地下で「ウンコの教室」がはじまろうとしていた。講座の告知を見て「公民館で本当にウンコの話をするんですか？」と問い合わせがあったそうだ。けれど会場は満員。幅広い年齢の方が集まっていた。ウンコは子どもはもちろん大人にだって人気なのだ。

この日の先生は『ウンコの教室』(ちくまプリマー新書)をはじめ、ウンコを起点にした様々な著書がある法政大学の湯澤規子先生だ。知らない人同士が集う会場は、独特の緊張感が漂うものだが、先生がスライドの前に立ち、羊毛で手作りしたという大きなウンコの片耳イヤリングをつけると、一気に会場の空気がゆるんだ。

ところでここまでに私は「ウンコ」と何度も書いてしまったが、普段ウンコの話をオープンにするタイプではない。しかし密かに最近ウンコのことを気になっていた。近年大きな地震が続いている。被災地の避難所のトイレは「てんこ盛り」となり、建物の陰などで用を足したあとも見られると聞く。そうした状況を迎えた時、私はうまく自分の排便に向き合えるだろうか。そんなことを心配し、考えていた時に、私が社会人学生として通う農学系大学の先生から、湯澤先生の名前を偶然聞きし、タイミグよく講座に参加することになった。

湯澤先生の関心の守備範囲は広い。学校のトイレの在り方、SDGsの目標6「安全な水とトイレを世界中に」の考察、地域に伝わる多様なおしりの拭き方、明治時代のウール工場に残る、工員の尿尿と大根の交換の記録「肥料渡帳」、パイオトイレなど、話が縦横無尽にかけめぐってゆく。食と同様にウンコは人の重要な営みだ。ウンコを中心にとすると、社会のたいいていの話はつながり、深まってゆくように感じられた。

講座の途中、参加者が話をするシーンもあった。とても元気な、90代だという男性は、疎開先で肥桶こへけをかついで肥料を畑にまいた経験があるそうだ。都会育ちの中学生にとって不慣れなことだったに違いないが、発酵させた人の糞尿は、臭さなどまったくなかったとのことだ。水洗トイレへと流すものとなってしまった尿尿も、少し時代を遡ると価値を持ち、巧みに活用されていたのだ。下肥しもえはイギリスではナイトソイルと呼ばれる。そして人糞の循環利用は、いま欧州で重要な政策のひとつとなっているそうだ。日本でも新しい取り組みが始まっていて、山形県鶴岡市の下水処理場には、汚泥を現代の技術で肥料に変えて食に生かすプロジェクト「ビストロ下水道」がある。輸入肥料の高騰が農業に大きな影響を与えているが、この活動が広がり、国内で良質の肥料をまかなうことができれば、未来の食卓も安定するのではないだろうか。

講座に参加し、ウンコはますます私の気になる存在となった。このことを友人に話すと「え、私もいま興味あるよ」と返ってきた。ロタウイルスにかかったお子さんの白いウンコを見た時に「ウンコが普通に出るって大事」と思ったとのこと。身近な友人が、ウンコの世界に注目してくれてうれしくなった。

これまで私たちはウンコについて話をしなすぎた。面白くてダイナミックで、新しい未来の種が埋まっているウンコの話を、もっとオープンにしてもいいのではないだろうか。湯澤先生も、ウンコについて話す人の母数が増えれば、いいアイデアも生まれるとおっしゃっていた。

(ちくまプリマー新書)

ブッククラブから

林芙美子著『放浪記』を読んで

青木 佐織

私は鹿児島出身である。

林芙美子と向田邦子が鹿児島で育った期間があるということは、鹿児島県人にとって自慢だと会でも話したが、言い過ぎではない。

私の母はバスガイドで、もう六十年近く続けている。その母が定期観光の桜島コースで挨拶に続けて歌うのが放浪記の冒頭にもある「旅愁」だ。その後は、「宿命的に旅人である私はこの恋いしや古里の歌を、随分怪しい気持ちで習ったものであった」までを暗誦する。

母の案内するバス（もちろん運賃は払っている）で幼いころから何度も聞いているフレーズだが、聞きたびになんとも言えない気持ちになり、それまでの旅行気分から一気に芙美子の世界へと連れて行かれる気持ちになったのを覚えている。

とはいえ、私はなぜかこの本を読んだことがない。母も勧めてこなかった。子どもには早いと思っただのかもしれない。そうして冒頭のみ何度も聞くばかりでここまで来た。

今回読む機会を与えられて実に初めて読んだのだが、読みやすかった、リズムがあった、という意見の方もあったが、率直なところ私は読みにくかった。誰のこと、何のことを言っているのかわからない箇所があり、人様が読むためのものとして出しているとは思えない不親切さがあった。時系列もバラバラ、まるで自分しか読まない書きつけのようだった。終始お金が無いこと、男運が悪いことをぼやき、すぐに騙され、故郷に帰った

といった実際に帰ったり、その後にはもう東京にいたり、自分の娘がこうだったらどんなに胃が痛いだろうと思った。

ただこれが百年前に書かれたものであることに本当に驚かされた。そしてこの破茶滅茶な生活が、講師の小平麻衣子先生の講義により、伏線として物語の最初から書かれている「カチュウシヤ」の影響を受けていることを知り、ただの日記ではないことを知った。

現在放送中の「虎に翼」では戦前は女性に男性の庇護のもとに生き、スニツとすることを余儀なくされていた。『放浪記』が初めて『女人芸術』に『秋が来たんだー放浪記』として発表されたのが「虎に翼」の寅子（ともしこ）のモデルとなった三淵嘉子（みぶちよしこ）が女学生（みづな）の頃。日本初の女性判事となった彼女も時代を先取りしている女性だが、生きたいように生きている『放浪記』の主人公、そしてそれを発表した芙美子もまた時代を先取りした女性だったと言える。

日記ではなく、多少の事実を元にした小説だとしたら、芙美子は世の中の女性に対してエールを送りたかったのではないか。日記という形で書くことで、一人の女性を浮かび上げられ、感情移入させることができる。芙美子の人生だと思われてもいい、虚構だと思ふ人がいてもいい。何かしらの形で誰かを元気にできればそれでいい。彼女の意図がそうであると願いたいのは私が彼女と同郷だからだけではあるまい。

最後に、短歌「京鹿子」の一節として有名な「花のい

のちはみじかくて、苦しきことのみ多かれど、風も吹くなり、雲も光るなり」について言及したい。

私の実家の玄関には巷（ちまた）でよく見られる「花のいのちはみじかくて 苦しきことのみ多かりき」が書かれた色紙が飾ってあった。帰るとすぐに目に飛び込む位置にあったそれは、年を経ることに違った意味合いをなしてきた。花のこだけを指しているのではないと知ったのは、『徒然草』の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」を知ったときだったか。それ以来活かしている花を始末する時には自分の身に置き換えるものだった。

しかし、続きを知って私の心は風（な）いだ。放浪記の主人公が辛いことがあっても強く生きていくことに通じていると感じ、年を取ることが怖くなくなった。

私も風と雲を感じて生きていこう。

（新潮文庫）

くになちブッククラブ

—記憶の欠片をひろい集めて—

太宰治『ヴィヨンの妻』

（新潮文庫）

講 師 尾崎 名津子
（立教大学・日本近現代文学）

と き 9月12日（木）
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込

* 次回は10月10日（木）
大江健三郎『取り替え子』
（講談社文庫）です。

* ブッククラブ HP ▶



新着図書から

〈総記〉

AIと分かりあえますか？ 渡辺豊編 (信山社)

文書館のしごと 新井浩文 (吉川弘文館)

時間をかけて考える 養老孟司 (毎日新聞出版)

明日、ぼくは店の棚からヘイト本を外せるだろうか

福嶋聡 (d Z E R O)

本屋のない人生なんて 三宅玲子 (光文社)

〈哲学 心理学 宗教〉

『社会の未来』を読む 高橋巖 (春秋社)

〈歴史〉

私たちの近現代史 村山由佳 (集英社)

明治・大正・昭和銀座ハイカラ女性史

野口孝一 (平凡社)

神と人と言葉と 武田徹 (中央公論社)

むさしのベストウオーク40コース

重信秀年 (東京新聞)

〈社会科学〉

ホロコーストからガザへ サラ・ロイ (青土社)

現代中国を知るための54章 藤野彰編 (明石書店)

ニュースのあとがき 大越健介 (小学館)

〈二人前〉と戦後社会 禹宗杭 (岩波書店)

世界史のなかの沖縄返還 成田千尋 (吉川弘文館)

カレー移民の謎 室橋裕和 (集英社)

日本社会とポジショナリティ 池田緑編 (明石書店)

ルポ海外出稼ぎ

NHK「クローズアップ現代」取材班 (大和書房)

働く世界のしくみとルール 小西康之 (有斐閣)

〈共働き・子育て〉世代の本音 本道敦子 (光文社)

性のモヤモヤをひっくり返す！

ちやぶ台返し女子アクション (合同出版)

トランスジェンダーと性別変更

高井ゆと里編 (岩波書店)

子ども若者抑圧社会・日本 室橋祐貴 (光文社)

性暴力についてかんがえるために 齋藤梓 (二藝社)

まちで生きる、まちが変わる 柴田大輔 (夕書房)

被災者発の復興論 山下祐介編 (岩波書店)

給食を通じた教育で子どもたちが学んだこと

和井田祐佳子 (農山漁村文化協会)

夜更かしの社会史 近森高明編 (吉川弘文館)

入門食と農の人文 湯澤規子 (ミネルヴァ書房)

〈自然科学〉

神秘的じゃない女たち

イム・ソヨン (柏書房)

〈工業〉

都市はよみがえる

山下昌彦 (鹿島出版会)

ノーマ原発公害

吉村良一編 (旬報社)

〈文学〉

さようなら大江健三郎こんにちは 司修 (鳥影社)

spring

恩田陸 (筑摩書房)

方舟を燃やす

角田光代 (新潮社)

マリエ

千早茜 (文藝春秋)

慟哭3・11

日本近代文学館編 (青土社)

定食屋「雑」

原田ひ香 (双葉社)

板上に咲く

原田マハ (幻冬舎)

図書室のついで

この惑星の声を聴く

ハッシュ

レンズをとおした鼓動から

お話し

お話し

高砂 淳二 (写真家)

地球温暖化による生態系の変化は著しく、地球・動植物・人の生活に大きな影響を与えています。

今回の講座では、地球をくまなく旅する写真家の高砂さんより、繊細なバランスのもとで調和する地球からのメッセージを作品と共にお届けします。

高砂さんのガイドのもと、大地や海の鼓動、萌え出す恵み、空の向こうにつながる宇宙に思いを馳せ、しなやかな地球の仕組みに守られて暮らしていることを思い出してみませんか。私たちにできる一歩を一緒に考えてみたいと思います。

高砂さんの経歴・本

ロンドン自然史博物館が主催する、自然写真の世界最高峰といわれる「Wildlife photographer of the year 2022」自然芸術部門で日本人初最優秀賞を受賞。海の環境NPO法人 (The Oceanic Wildlife Society) 理事。みぎや絆大使。

著書に表題作 (クレヴィス)、『PLANET OF WATER』(日経ナショナルジオグラフィックス社)、『Children of the Rainbow』(小学館) 他多数。

とき

10月15日 (火)

夜7時〜9時

ところ

公民館 地下ホール

定員

70名 (申込先着順)

申込先

9月12日 (木) 朝9時〜

電話またはホームページより申込

公民館

042(572)5141



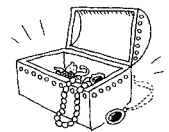
図書室のついで

『6カ国転校生』

ーナー ज्याの発見ー

お話 キリーロバ・ナー ज्या

(クリエーティブ・ディレクター、コピーライター、絵本作家)



ナー ज्याさんはソ連 (当時) に生まれ、両親の転勤に伴い 6 カ国 (ロシア、日本、イギリス、フランス、アメリカ、カナダ) へ転校し、それぞれの現地で学齢期を過ごします。使う筆記用具の種類、座席の配置、ランチの過ごし方、授業の様子や、児童・生徒に求められることも国によって全く異なりました。転校する度に「普通」がめまぐるしく変化していく日々を送っていたナー ज्याさんは「教育にも、自分らしさにも正解はない、違いがあるだけ。違いから自分の個性や強みを見つけていくことが大切」とおっしゃいます。

今回は、ナー ज्याさんが体験した各国の学校の様子や、様々な価値観の中でどのように自分らしさを発見したのかお話いただきます。

〈ナー ज्याさんの本〉

表題作 (集英社インターナショナル)、『ナー ज्याの 5 つの学校』 (大日本図書)、『からあげビーチ』『ヒミツのひだりききクラブ』 (共に文響社) ほか

とき 10 月 18 日 (金) 夜 7 時 ~ 9 時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70 名 (申込先着順)

申込先 9 月 17 日 (火) 朝 9 時 ~

電話またはホームページより申込

公民館 ☎ 042 (572) 5141



〈私の本棚から 第 6 回〉

イアン・フレミング著

『007号

ベルリン脱出』



鍛冶 勝

スパイ小説の白眉、英国秘密情報部ジェームズ・ボンドを生んだ、著者のイアン・フレミングは、実際に、海軍秘密情報部に勤めていました。小説の作者は、本物のスパイだったのです！ 悪と闘い、世界を滅亡の危機から救う、暗号名 007 の冒険は、事実に立脚した物語でした。

第二次世界大戦下の一九四一年。連合国のスパイとして、若き日のイアン・フレミングは、上司にあたる海軍情報部長・ゴッドフリー提督と、秘密裏にアメリカへ、水上機で飛び立ちます。

途中、リスボンに立ち寄った二人は、ドイツのスパイが、カジノで博打をしていると聞き、勇み立ちます。見物に行ったではありません。博打を、やりに行ったのです。イアン・フレミングは、ポケットマネーの 50 ポンドを元手に、正々堂々、ドイツのスパイにルーレットの勝負をいどみます。

あっさり負けました。フレミングは、ドイツのスパイに、裸にむかれてしまいます。虎の子の 50 ポンドはおろか、部長ゴッドフリー提督の信用さえ失ったフレミング。日本の時代劇になおせば、サラシ一枚で、表に放り出されてしまったのです。

この苦い経験は、一九五三年発表の、007 栄光のデビュー作『カジノ・ロワイヤル』 (創元推理文庫 2019 年、白石朗氏による新訳が刊行されました) に、そのまま生かされています。

神は「細部にやどり」ます。小説であれ、映画であれ、

つくりものだからこそ、事実をないがしろにしてはいけません。小説として大きなウソをつくために、小さなウソをついてはいけないという、暗黙のルールが存在します。人形浄瑠璃の近松門左衛門が唱えた、「虚実皮膜」です。芸術は、虚 (虚構) と実 (事実) の、あわいで輝きます。フレミングのスパイ小説を、荒唐無稽とお思いの方が、もしいらつしやるとすれば、それは間違いです。その世界を熟知した者が、細かな事実で、強固な土台を構築したからこそ、007 シリーズの全作品は、上質なエンターテインメントとして成功をおさめました。

さて、本編の『007号 ベルリン脱出』ですが、短篇三本のほかに、ボナナスとして、「スリラー小説作法」と銘打った、ベストセラーを生む秘訣が、収録されています。わずかに 17 ページのエッセイですが、読むだけの価値があります。作者がここで、ぬけぬけと、流行作家の手のうちを明かしているからです。

「わたしももう、デビューから十三年たった、ベテラン作家となりました。今日は特別に、世界中に原稿が売れる『小説のノウハウ』を、この本を読んだ人だけに、ナイショで教えて進ぜましょう。わたしの成功体験から、一人でも多くの作家が生まれたら、望外の喜びです」――読者をそのかす、大胆不敵な挑戦状。フレミングは、油断のならないスパイです。

(早川ポケットミステリブックス ナンバー 956)

係から

今月で鍛冶さんの「私の本棚」は最終回です。毎回選りすぐりの本を丹念に紹介していただきました。誠にありがとうございました。

